

## 「西側」帝国主義に迎合する欧米「左派」

平和のための黒人同盟

マンスレイヤー・レビュー 2025年3月11日

<https://mronline.org/2025/03/11/the-eurocentric-u-s-left-carries-water-for-neoliberal-right-again-response-to-the-ukraine-solidarity-network/>

（ウクライナ支援を続ける米国の）「ウクライナ連帯ネットワーク（USN）」の支持者たちは、道徳的にも政治的にも矛盾した態度をとっている。ウクライナの指導者ゼレンスキーと会談して代理戦争の支援を再確認した欧州の指導者たちと同じだ。彼らは、自己決定や権利を安易に口にしているが、占領下のガザでイスラエルによる違法な包囲に直面しているパレスチナ人の自己決定については何も語らない。

これこそは真っ向から立ち向かわなければならない白人特権であり、誰が人間で、誰が権利を有しているかを定義する力である。ウクライナ連帯ネットワーク（USN）の支持者や、左派的な言辞を使って欧州中心主義的な階級協調を隠そうとする「白人寄り」左派のかなりの人たちが想定している力である。

ウクライナにおける代理戦争が終結に向かって見えるように見える中、この3年間で米国の左派の大部分に深刻な失敗があったことが、これまで以上に明白になっている。特に彼らは、客観的な唯物論的原理に基づいた分析を行うことができずに、主観的、道徳的な立場をとっている。この失敗は目新しいものではなく、リビア、シリア、ニカラグア、ティグライ/エチオピアその他において、米帝国主義と連携した左派の誤りを反映している。彼らは米國務省やNATOの主張を無批判に受け入れて、自分たちが支持すると主張する反帝国主

義の原則を裏切り、逆に世界的な抑圧と搾取を永続させる勢力に加担しているのだ。

この失敗は、USN の声明に顕著に表れている。それは欧州中心主義と親米ナショナリズムに満ちており、自らの主張の正当性を否定するだけでなく、米主導の西側帝国主義との幅広い協調関係をも露呈している。

USN は、「思いやりを持つ人なら誰でも、この戦争を一刻も早く終わらせたいと思っているが、部外者がウクライナに降伏を要求することは道徳的に受け入れられない。USN はウクライナ国民の自己決定権を引き続き支持し、平和協定の受け入れ可能な条件を自ら決定する権利を支持する」と述べている。ウクライナ人の自己決定権についての同情や道徳心に訴えるが、それは紛争に至った経過や事実に対する理解の乏しさを露呈している。ウクライナをロシアの理不尽で邪悪な侵略の哀れな犠牲者と位置づけることで、現実を完全に覆い隠している。

[米国が支援するクーデター政権](#)が、民主的に選出されたヴィクトル・ヤヌコーヴィチ大統領を 2014 年に追放し、国内にいた危険なファシスト勢力を[合法化して](#)警察や軍、政府に取り込んだ。キエフ政府は彼らを利用して、ドネツク、ルハンスク、ドンバスなど東部の都市や、ロシア系住民の居住地域への攻撃を主導した。また、ベラルーシ、ロシア、ウクライナ、フランス、ドイツの各国大統領が署名したミンスク 2 協定は故意に破られた。これに EU 加盟国が署名したのは NATO の代理軍としてロシアを攻撃するための武器をウクライナが蓄える時間稼ぎのためだった。そのことはアンゲラ・メルケル前ドイツ首相が[2022 年末に認めている](#)。

USN は、米国資本の中には、ロシアとドイツの経済を分断し、米国が欧州全体への影響力を強めることをめざした地政学的な目標があることをまったく認めない。それどころか、この目標をウクライナの「自己決定」に対する米国の支援というイデオロギー的な隠れ蓑で覆い隠している。しかし、彼らの「自己決定」に関する分析には、ウクライナのロシア国境に軍隊を配備し、武器を供給し、軍事演習を行うことでロシアを弱体化させ、政権交代を誘発するという、NATO の侵略戦略は含まれていない。これらの指摘は、先週、EU 議会で、[元](#)

[新自由主義の優等生エコノミスト、ジェフリー・サックス氏によって提示されたものである（28:00の時点）。](#)

NATOの拡大と米国による軍事化が緊張を悪化させたという全体状況を認識できない左派の失敗は、西側帝国主義の現実の姿に無関心になっている根深い傲慢さを露呈した。帝国主義は資本主義の最高の発展段階であり、非帝国主義国やグローバル・サウスの人々に対する搾取、支配、抑圧のグローバルな構造を意味する。歴史のこの時点において、米国主導の帝国主義はグローバルな影響力や衛星国支配を引き続き妄信的に追求している。それに匹敵する帝国主義はほかに存在しない。米国主導の帝国主義こそは主要な矛盾であり、主要な敵である。

しかし、排外主義的な立場から（中国などを同じ帝国主義だとする）「社会帝国主義左派」は、米帝国主義と対立するのではなく、世界的な階級闘争や民族闘争を単純化し、「民主主義と権威主義の戦い」といった右派的な枠組みをオウム返しのように繰り返している。

この失敗は単に知的なものではなく、政治的なものである。NATOや米国国務省に肩入れする左派は、植民地化された世界中の黒人と褐色の人々に対して戦争を仕掛けている勢力と事実上、手を組んでいるのだ。彼らは、NATOと西側の勝利がグローバル・サウスにとっての惨事となることを理解していないし、気にも留めていない。

心配すべきは、ロシアを通じてヨーロッパのファシズムの糸を操っているアレクサンドル・ドゥーギンという名の道化師であって、世界を脅かす米国・EU・NATOの戦略的敗北ではないという。これ以上に欧州中心主義的なことはない。

米国の左派の中にある、こうした欧州中心主義的で親米的なナショナリズム、協調主義に反対することは、帝国主義反対の団結と力を築くために不可欠である。反西側帝国主義に反対の立場をとる彼らは、米国主導の帝国主義と白人至上主義に原則的に反対するという困難な作業を拒否することで、西側帝国主義

の本質と、地球上には非ヨーロッパ系多数派を弾圧する共通の敵がいるという現実について、混乱を助長している。

米国の左派は、これらの失敗を認め、反帝国主義の原則に立ち返らなければならない。そのためには、リベラルな理想主義を放棄し、国家のプロパガンダに同調する主観的な道徳的立場を拒絶し、真の左派政治の基盤である客観的な唯物論的分析に立ち返らなければならない。そうでなければ、帝国主義支配の勢力を強化し、人民の権力と集団的解放のための闘争を裏切ることになる。

(了)

オリジナル記事：2025年3月3日 [Black Alliance for Peace](#) (ブラック・アライアンス・フォー・ピース) スタッフによる

【翻訳チェック 田中靖宏】